

## 第2節 松江藩の台場跡

勝部 昭（島根県文化財愛護協会会員）

### 1. 松江藩の海防と台場

18世紀末頃から外国船が日本周辺の海域に出没するようになり、幕府は沿岸の諸藩に厳重な警備を命じ、各藩は、要害の地に大砲を据えつける台場を設けた。

松江藩の場合、「唐船御手当配帳」（「日御碕文書」）によると寛政5年（1793）、松平氏第7代藩主治郷が沿岸に唐船番隊を配置した。寛政11年（1799）頃には、18か所の台場が築造された（『松江市誌』1941）。その後、松平氏10代藩主松平定安が国内巡視した際は9台場があり、文久3年（1862）には森山、川下、杵築の3か所に台場が築かれた（原剛『日本海防史の研究』p.256.257）。

幕府が諸藩に外国軍艦購入を許可して間もない、文久2年（1862）11月、前述の松平定安はいちはやく鋼鉄製の一番八雲丸と木造の二番八雲丸という2艘の軍艦を長崎で購入し、防備体制に力を注いだ。翌年2月2日に中海の大井沖に錨をおろし、出雲沿岸港湾の深浅測量や隠岐への兵員輸送などをした後、10月28日には藩内沿岸各所に砲台構築のため大砲・機材を運搬している（鈴木樸實「松江藩海軍歴史年譜」『山陰史談』19号山陰歴史研究会）。

松平直亮著『松平定安公傳』「唐船番隊の沿革及其改良」の項に、台場は次の18か所が載る。

島根郡 三保関の加鼻（土居構）、＊軽尾浦、片江浦の大崎ノ鼻、＊野波浦の竹ヶ鼻、水浦の幕島、  
秋鹿郡 片匂浦の宮崎鼻 ＊江角浦の龍ノ口ノ上、古浦の塩床（土居構え高さ八間許）  
楯縫郡 ＊三津浦のノシドノ谷 十六島浦のアミヤ 川下村の釜屋谷  
神門郡 ＊鷺浦の鶴島ノ上 日御碕の経島ノ上と＊小黒田 杵築の神光寺川尻 指海村のカケノ山  
（土居構） ＊多岐村の小濱ノ上 口田儀村の大畑山ノ下

唐船番隊は中国方面から来る船を唐船といい、それを監視、警備するなどの役目を担った。18か所のうち砲術方は11か所あり、7か所（＊印）は棒火矢方であった（『松江市誌』）。棒火矢は大筒によって火箭を発射するものである。また、嘉永7（1854）年2月には、藩内の砲台を巡検するため、仕置役大橋茂右衛門を従えて松江を出発し、杵築大社及日御碕神社に詣でた後経ヶ崎砲台（日御碕砲台）、カケ山砲台、多岐村小濱の上、口田儀村山ノ下砲台、釜谷及び十六島の砲台を巡視している。さらにその後、三保関の加鼻砲台、古浦江角の二砲台をも巡検している。

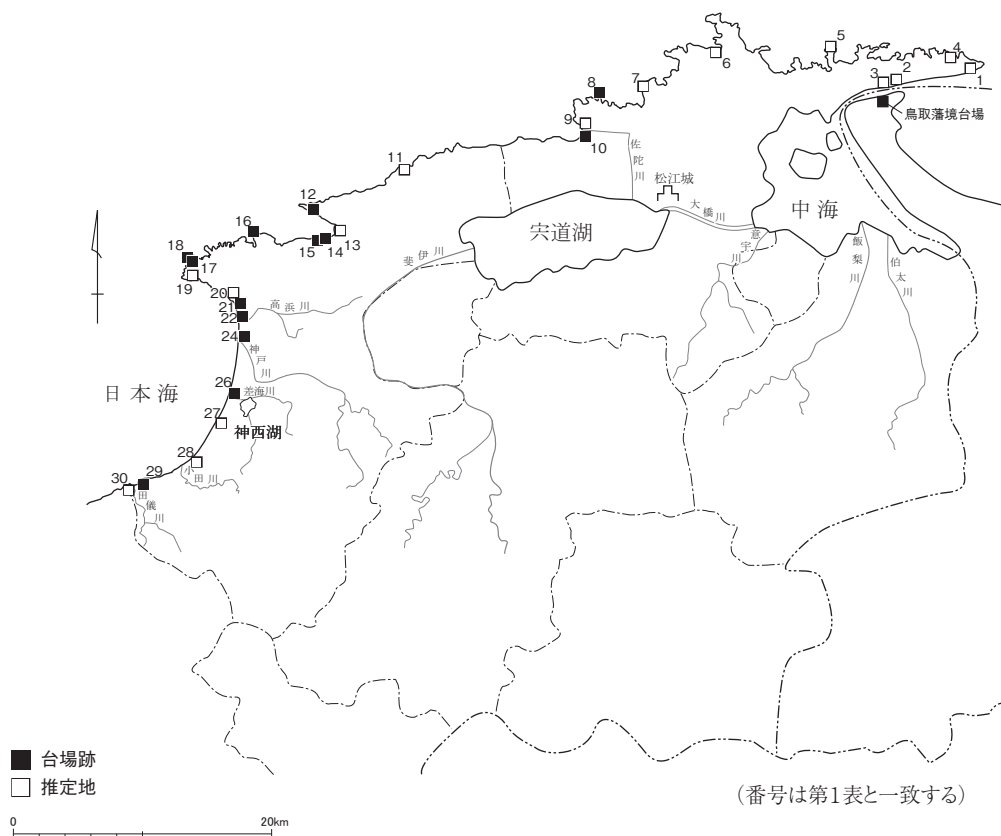
なお、海上の防備、監視するためにおかれた遠見番所は、美保関の馬着山（松江市美保関町）、多古浦上ヶ原（松江市島根町野波）、手結浦風見山（松江市鹿島町手結）、アミノヤノ上山（出雲市十六島町）、宇龍（出雲市大社町）、大畑山（出雲市湖陵町）の6か所が載る。

### 2. 松江藩台場の跡

松江藩の台場は、原剛『幕末海防史の研究』には20か所の記載がある。西ヶ谷恭弘編『国別城郭・陣屋・要害台場事典』2002年刊には23か所記述され、その多くの台場跡について、遺構は確認できず、とある。

島根県教育委員会『改訂増補島根県遺跡地図 出雲・隠岐編』2003年刊には、一覧表のなかに12か所の台場跡が記載されるとともに、35000分の1の地図上に所在場所が示されている。すなわち、松江市の鹿島町片句の片句御台場跡、美保関町森山砲台跡、出雲市の小津町久砲台場跡、十六島町の網屋台場跡、三津町野志戸台場跡、大社町仮ノ宮台場跡、赤塚台場跡、湊原台場跡、欠山台場跡、湖陵町大池台場跡、多伎町の口田儀台場跡（1）、口田儀台場跡（2）である。島根県教育委員会『島根県歴史の道調査報告書』記載の台場跡は 美保関町加鼻台場、出雲市日御碕台場、大池台場等である。

これら松江藩の台場跡について、いくつかの踏査をしたので、その概要を記述する。



第38図 松江藩台場跡の位置図

### （1）出雲市の台場跡

松江藩西側に位置する日本海側沿岸の台場跡は次のようである。

#### ①三津浦ノシド谷台場跡 出雲市三津町野志戸谷所在

島根半島の北側に位置する三津浦の三津港から西方に、海に突き出た海浜の岩崖や大岩沿いに1.5km歩いた場所に野志戸谷がある。狭い谷の両側に急峻な丘陵が迫る。谷には川幅約5mの小川があり、その小川の両岸は高さ約2mの石垣による護岸がされている。平坦地には石垣による区画があるとともに道がある。谷奥のほうは水田跡かとも思われるが、海浜に近い場所は建物（屋敷）跡と思われる。土塁跡などは確認できない。谷西側の標高65mある急峻な丘陵上に登ったが、頂上尾根部は幅が約3～5mと狭く、砲台をおくような台場とは感じられないと思われた。頂上からは隠岐の島前、島後の島がはっきり見え、眺望の良い場所である。

②網屋浜台場跡 出雲市十六島町所在

出雲市教育委員会が調査 本書第3章1項参照

③河下台場跡 出雲市河下町所在

出雲市教育委員会が調査 本書第3章2項参照

④鷺浦鶴島台場跡 出雲市大社町鷺浦所在

鷺浦港の東側の、北1.3kmに突き出た岬の先端近くの、海上に浮かぶ鶴島に造られた台場の跡。海上のため渡海し調査することができなかった。地図上で見ると周囲は約400m、周辺には赤島、船見島、カナクソ島などの小島がある。

⑤日御碕台場跡 出雲市大社町日御碕所在

日御碕神社の西海岸、経島の見える位置につくられた台場の跡。規模は、永見高明所蔵文書「文久元年軍事留」（以下「永見家文書」と記す）に載る「日御碕御台場図」によると、日御碕神社地内と人家との間、濱にコの字形に囲んだ石垣（石塁）を築き、長さ8間（14.5m）の土居に銃門が3門、高さ3尺6寸（1.09m）、防檀は高さ3尺6寸（1.09m）、平地の高さ1尺5寸（0.45m）、籠台石が書かれている。現状では、御碕区民会館近くに台場の石垣の一部が矩形に残る。残存長は10m×3.5m、高さ0.7mである。

⑥日御碕小黑田台場跡 出雲市大社町日御碕所在

大社から日御碕にむかう途中に黒田湾がある。その手前が小黑田で、海沿いの高台かと思われるが不詳である。

⑦日御碕経島台場跡 出雲市大社町日御碕所在

日御碕神社の西方海上100mに位置する周囲約400mある経島に造られた台場である。天然記念物ウミネコの繁殖地である。現在、祭祀場となっており渡海上陸はできない状況にある。『歴史の道調査報告書』には嘉永2年に見張所が経島に、御台場跡は不明としている（『歴史の道調査報告書』第10集、1999年）。

⑧仮ノ宮台場跡 出雲市大社町杵築北所在

杵築北の海浜にあった台場で、その場所は稲佐浜の船頭会館あたりといわれる。現在は民家のならぶ集落となっており遺構等は不明である。

なお、この台場跡の北方に稲佐台場跡があったと伝える（大社考古学会大谷従二の調査による）。

⑨赤塚台場跡 出雲市大社町杵築西所在

大社の稲佐浜に近い砂丘地、字台場山にあり、現在は山林である。大社湾を望む、海浜に位置し、



20. 稲佐台場跡 21. 仮ノ宮台場跡 22. 赤塚台場跡  
23-1. 湊原(北)台場跡 23-2. 湊原(南)台場跡  
26. カケノ山台場跡  
□ 消滅・推定地 ■ 台場跡 (番号は第1表と一致する)

第39図 大社湾岸の台場跡の分布



写真 34 赤塚台場跡（出雲市大社町杵築西）



写真 35 赤塚台場跡の土塁

西向きに台場が造られている遺構は北側（右翼）の一部分が、道路によって削られているが、遺構は、砂丘を加工して築いた土塁（土居），堀らしい跡が認められる。銃眼（仕切り口）や溜と思える平坦地もあるようである。砂浜海岸の汀までは 40 ～ 50 m ほどある。「永見家文書」には神光寺川尻御台場とある。神光寺川は現在、堀川と呼び、その河口近くの右岸，砂丘地に位置する。永見家文書の御台場図によると，濱から 18 間（32.7 m）辻に，浜側から順に堀，土居，防檀，溜がつくられ平面形は台形状（稜堡多角形）をする。土居と防檀の間の長さ 45 間（81.8 m）とある。堀は斜口 5 間 1 尺 8 寸（9.6 m）底幅は 1 間半（2.73 m），源は 1 間 3 尺 9 寸（2.99 m），溜は土居外堀溜より 9 尺 9 寸（3 m）深く，銃門は 7 門などとある。大砲の覆は三角屋根である。

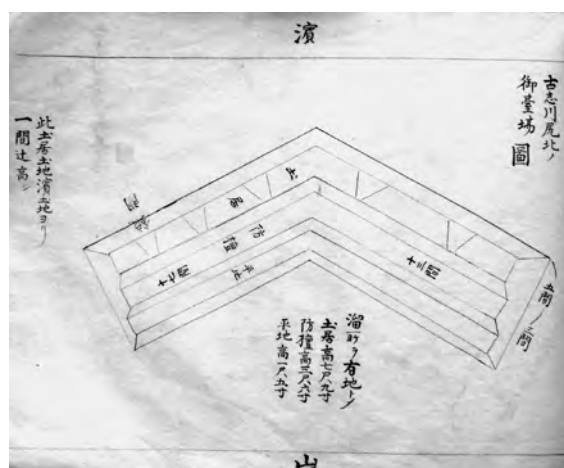
#### ⑩湊原（北）（古志川尻北）台場跡 出雲市大社町湊原所在

古志川は現在神戸川といい，その河口右岸側に造られた台場である。現状は山林，砂丘地の丘陵上に造られた台場の跡が残る。「永見家文書」によると，「此の土居土地濱土地ヨリ一間（1.82 m）辻高シ」などとあるほか，土居の高さは 7 尺 9 寸（2.39 m），防檀は高さ 3 尺 6 寸（1.08 m），平地は高さ 1 尺 5 寸（45.5 m），土居に銃門が左側に 3 門，右側に 2 門が描かれている。

踏査した結果，遺構は，道路沿いにある湊原地蔵堂と道路を挟んだ南側と北側に土塁遺構が残る。道路が造られたため土塁が 9 m 分断されている。平面形は，コの字状のようで，高さ 4.2 m，長さ約 90 m の土塁が確認できる。そして，東南側端は民家の方へ直角に曲がり 20 m を測る。

#### ⑪湊原（南）（古志川尻南）台場跡 出雲市西園町所在

神戸川（古志川）河口の左岸にあった台場である。現在河口近くまで車道が通じている。現状では砂丘地に台場跡かとおぼしき形状の土地があるものの，遺構は明らかではない。「永見家文書」には台場の図が載り，「此の土居ノ出地濱土地ヨリ一間半（3.33 m）辻高シ」などとある。

第 40 図 永見家文書「古志川尻北ノ御臺場図」  
(永見高明氏提供)



⑫カケノ山台場跡 出雲市湖陵町差海所在

海浜に近い砂丘地で、現状は山林、かつて養豚場として使われていたところを含む場所である。土塁があり、平面プランは方形状のようである。土塁の一部は壊されているが、西南の隅の部分は、土塁の上幅 2.1 m、溜側との比高は 1.9 m、長さは 20 m × 10.5 m（全長は約 30 m の方形か）。土塁は海浜にむかって段状につくられているように見受けられ、堀（塹壕）が二重にあるかのようである。砂丘海浜の汀からはおよそ 70 ～ 80 m の位置である。



写真 36 カケノ山台場跡の土塁（出雲市湖陵町差海）

⑬大池台場跡 出雲市湖陵町大池所在

差海川河口近くの海岸を望む丘陵上に文久元年（1861）ごろ築造されたと思われる台場の跡。この台場の上の山は大砲山呼ばれる。『歴史の道調査報告書』には、明治 22 年、差海、板津、大池の 3 村が合併し西浜村となった際に、台場跡は役場として使われたとある。

⑭田儀台場跡 出雲市多伎町口田儀上町東笠取坂所在

J R 田儀駅の西方 400 m、国道 9 号沿いの海岸側に手引ヶ丘台場公園が造られ、山口県や新潟県の例をもとに砲台、大砲が復元されている。この台場は嘉永 6 年（1853）に築かれた（『歴史の道山陰道Ⅱ』）。台場跡は、この復元された台場公園となっている場所から西方へ 3 軒目の民家が建つ場所にあったと伝える。東側 2 棟の建物敷地面よりも高さが一段低くなっており、海浜との比高差は 20 m ある。海岸には岩礁の平坦な場所がある。

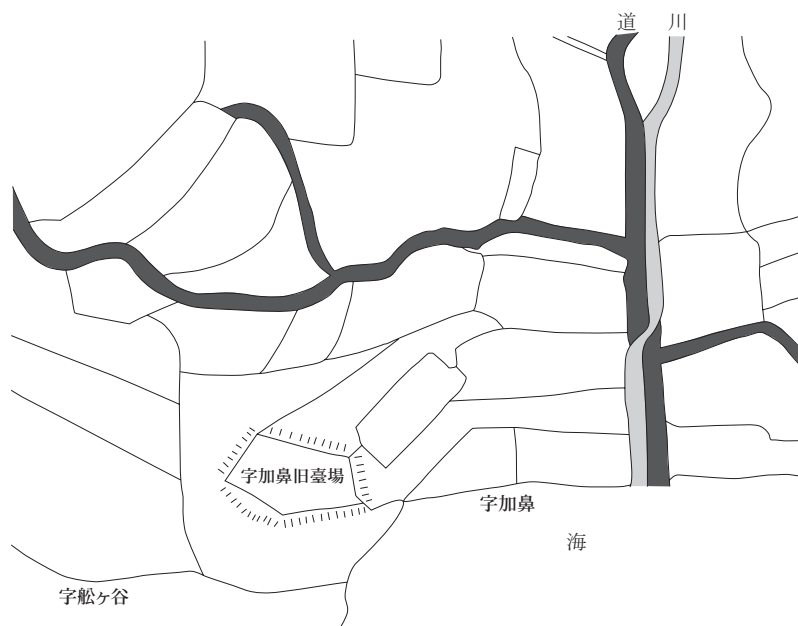
⑰大畑山の下台場跡 出雲市多伎町口田儀町向、⑱小浜台場跡 出雲市多伎町多岐は、遺構の様子不明である。

（2）松江市の台場跡

島根半島の東部、日本海岸沿いに 10 か所の台場が造られた。その遺跡の状況はつぎのようである。

①加鼻（かばな）台場跡 松江市美保関町美保関字加鼻所在

美保関港から地蔵鼻の美保関灯台に向かう湾の東側丘陵上に客人社などが鎮座する。その東、燈台にむかう道路沿いの字船ヶ谷の東側が字加鼻



第 41 図 明治 22 年八束郡美保関村美保関切図トレース図

である。美保関村の明治22年の切図には、「加鼻旧臺場」という字名がみえ地割は五角形である。台場の形態分類では稜堡多角形と考えられる。加鼻の海岸に沿う、東と西の丘陵にはさまれた谷あいに一軒の民家がある。その谷の西側丘陵上のようなのである。谷の民家の後ろには石垣に囲まれた3段の平坦面がある。民家裏の部分は上端が段状となりかつ弧状に造られた石垣である。また、海岸の海面近くには平坦な岩礁がある。昭和30年代中頃、県道建設の際に加工したといわれるが、砲台施設にかかわる可能性も想わせる。



写真 37 美保関加鼻台場跡推定地（松江市美保関町加鼻）



写真 38 加鼻台場跡推定地近くの石垣

## ②日向浦台場跡 松江市美保関町森山日向浦所在

境港市の境台場（国指定史跡）は鳥取藩最大の台場である（『境港市史通史編 上巻』）。ここは日本海から美保関、境港をえて中海に入る要害の地である。小野篁一文庫（境港市民図書館蔵）の文久3年以降と考えられている「幕末絵図」には境台場の対岸、松江市美保関町側に「ダイバ」（日向浦台場）、中世の城跡などの記載があり、海防上重要視されていたことが分かる。日向浦台場は境水道大橋の西側海岸にあったと伝えるが、造船所等がつくられて遺構は現存しない。なお、森山砲台跡は「松江藩列士録」に、榎並庄太夫の履歴に「元治元年（1864）甲子五月七日、嶋根郡森山竹崎御台場砲術方兼被仰付」とあり、文久年代以後に築造されたものと思われる、とされる（『島根県歴史の道調査報告書』第10集、1999年）。

## ③軽尾（かるび）台場跡 松江市美保関町軽尾所在

軽尾は美保関町の北の海岸側に位置し、戸数10戸ほどの民家がある小さな浦である。台場の存在について地元住民の方に尋ねたが、台場の伝承はないという。海岸の一部を探索したが、遺構確認はできなかった。

## ④福浦台場跡 松江市美保関町福浦所在

福浦は島根半島の南側にある浦であるが、台場の場所は明らかでない。

## ⑤片江浦大崎鼻台場跡 松江市美保関町片江所在

島根半島の北側、七類港右側の御崎先端部が大崎鼻である。突端部分は岩が露出しているので、台場のあった場所と想像されるが、付近はかつて鉾石採掘地であったといい、陸上から踏査できなかった。

⑥野波浦竹ヶ崎台場跡 松江市島根町野波所在

地元の人に尋ねたが確認できなかった。

⑦水浦幕島（まこじま）台場跡 松江市鹿島町御津所在

松江市鹿島町御津と島根町大芦境の御崎に当たる海岸の丘陵地を幕島という。御津の港からみると、東側の丘陵の崖面が横縞模様状に地層が見え、あたかも幕のような感じがする所から名づけられたといわれる。丘陵頂上あたりが台場跡の候補かと思われる。『境港市史』には遠見番とある。

⑧片句浦宮崎鼻台場跡 松江市鹿島町片句所在

片句の港集落の両岸に丘陵が突き出ている。その東丘陵を越えるとツヅラ湾である。この湾の東側に長く突出した岩場の先端が宮崎鼻である。ここは岩肌が突出し丘陵上に台場跡がある。半島部を連絡する県道からは徒歩で尾根伝いに道があり、それを下っていくと行きつく。釣人の休憩所近くの藪あたりが台場跡といい、近くには径6～8mの円形状の窪地が2か所ほど認められる。宮崎鼻東側の湾は宇中湾で、現在中国電力島根原子力発電所3号炉が建設中である。

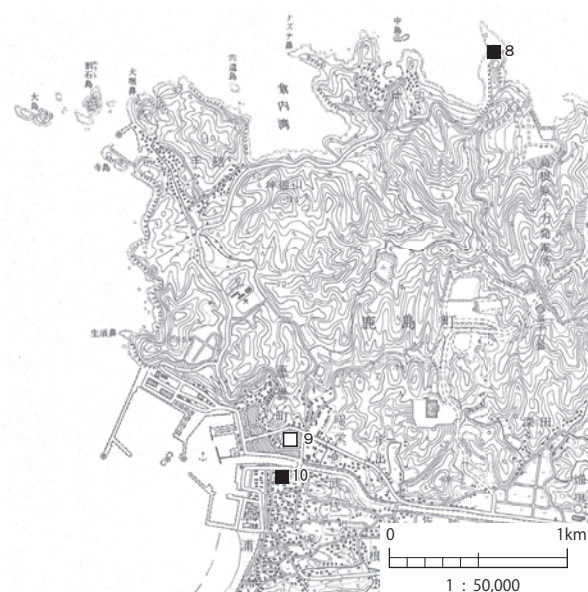
⑨江角浦龍ノ口台場の跡 松江市鹿島町恵曇所在

佐陀川河口の右岸側にあった台場である。現在は港湾の整備がされ、海浜の埋立てにより遺構は遺存しない。野津左馬助の後述の報文によると、図中に□の記号で江角台場と記されている。

⑩古浦塩床台場跡 松江市鹿島町古浦所在

湊橋を渡った佐陀川の河口、左岸側の砂丘地に造られた台場の跡である。砂丘残丘の高まり付近が台場の跡で、遺構は土塁（防塁）の一部が遺存している。砂丘地の下層には弥生時代等の古浦遺跡が遺存しているところと重なると考えられる。野津左馬助「松江藩営古浦砲台址」（『島根県史跡名勝記念物調査報告書』10輯）には、出雲沿岸の9砲台中、江角、古浦の2砲台は松江城下の背面しかもその距離僅かに2里ばかりで、特に藩が重きを置いたと推察し、保存もよいことから調査を実施した、と記されている。

前記野津は、古浦砲台の構築について、前掲書に「古浦台場は二部から成っておる、北部に其の突端佐陀川に接したる部分を「先台場」此方に隣接する南の部分「此方台場」と俗称し二台場の間は僅かの間隔を以て相分れ、前面恵曇湾に向て一ノ字の位置を取っておる。両台場共長各百三十間許（約



8. 片句浦宮崎鼻台場跡 9. 江角浦龍ノ口台場跡  
10. 古浦塩床台場跡 (番号は第1表と一致する)  
□ 推定地 ■ 台場跡

第42図 松江市鹿島町の台場跡

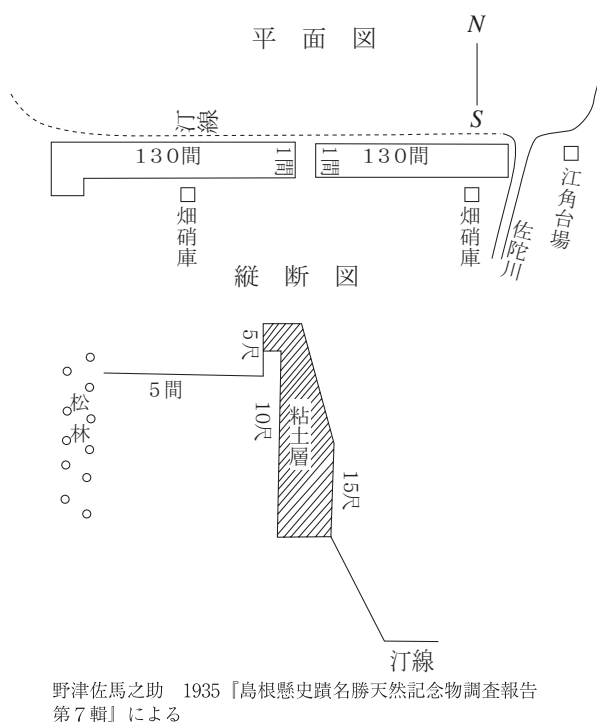


写真39 片句浦宮崎鼻台場跡（松江市鹿島町片句）



236 m) 二台場共略ぼ同高を有し幅一間許りである、内部は直角をなしたる深さ五尺（1.52 m）の低窪地を作り、此地は後方に向かって幅五間（9.1 m）の平地をなし軍兵の動作に便しておる。（中略）此台場の地は古浦海岸の砂丘地を利用したものと思われるが、従って其の地盤も堅固でないから砲座の位地には深さ十尺（3.03 m）巾二尺（0.61 m）以上の粘土を以て砂地に填入したので、今も傾斜ある岸中に明らかに粘土層を露出しておる（中略）砲は四門を備ひ付くる設備あるも、其砲は常備せず事ある時に於て松江から運搬する定めであった（中略）煙硝倉は二ヶ所あって一は「先台場」の北端、一ヶ所は「此方砲台」の中央に作られ共に穴倉式にて僅に屋根が地面に出ておったとの事である。」さらに、「煙硝倉は穴倉式のもので、二ヶ所あった、砲は周り二尺（0.6 m）位、長さ五尺（1.52 m）位の青銅砲で、砲車は木造」、とも記している。なお、南東側の砂丘に覆われたタンボ山やその西側の谷の平坦地は武代練兵場跡と伝える。

現在は、佐陀川にかかる湊橋の南側、みなみ商工会館から海浜側に数十メートル歩いた場所に、砲台場の「此方台場」と呼ばれた土塁の一部が長さ 20 m ばかり残る。現状では上幅 5 m、下幅 7 m ほどである。砂地に粘土を選び版築状に造った土塁の断面が露出している。佐陀川の左岸側の西田米穀店から南に入ったあたりである。恵曇港修築工事の平面図によると、かつては現状とずいぶん異なり、すぐ近くまで海浜であったことがわかる。



第43図 松江市鹿島町古浦塩床台場跡



写真 40 古浦塩床台場跡（松江市鹿島町古浦）

### 3. まとめと今後の課題

先学の調査等をもとに現地確認に努めたが、樹木が繁茂し藪漕ぎの必要なところも多く、遺構の確認はしづらい状況にあった。松江藩の台場は、立地上から大きくわけて①島②岬先端部付近の丘陵上、③河口近く、に築造されている。いずれも眺望のきく海辺防備上の要所である。また、構築法からは



①土居構えと表記された土塁を構築したものや②岩礁（岩場）を利用したもののようなものがある。規模は大社湾岸沿いに造られた台場跡は砂丘地を加工し、土塁を築くなどした大きな規模なものである。比較的よく遺存している台場遺構は、アミヤ台場、川下台場、赤塚台場、湊原台場、カケノ山台場、宮崎鼻台場等である、いずれも江戸時代の松江藩の海防を知る上で貴重である。

今回、遺構測量図の作成を望んだが、果たすことができなかった。今後、江戸時代の文書や明治時代の切図などの調査や図面作成などが必要である。さらに、遺構保護の取り組みも求められる。

調査にあたっては、以下の関係機関ならびに諸氏にご協力をいただいた。ここに記して深謝いたします。（順不同、敬称略）

島根県立図書館、境港市民図書館、松江市立鹿島歴史民俗資料館、西尾良一、景山真二、錦織慶樹、加納嘉彦、中原健次、曾田稔、森脇弘、山本弘、乾隆明、田中源一、永見高明、内田文恵、和田美幸

#### 参考文献

永見家文書「文久元年軍事留」出雲市永見高明所蔵

松平直亮 1934『松平定安公傳』松平直亮

野津左馬之助 1935「松江藩営古浦砲台跡」『島根県史跡名勝天然記念物調査報告書 7輯』島根県

野津静一郎 1941『松江市誌』松江市

青山康次 1960『恵曇』

多伎村編 1961『田儀村誌』

境港市編 1986『境港市史上巻』境港市

美保関町編さん委員会編 1986『美保関町誌上巻』美保関町

原 剛 1988『幕末海防史の研究』名著出版

島根県教育委員会 1996「島根県歴史の道調査報告書第2集」『歴史の道調査報告書 山陰道2』

島根県教育委員会 1999「島根県歴史の道調査報告書第10集」『歴史の道調査報告書 松江美保関往還 松江市築往還 巡検使道』

西ヶ谷恭弘 2002『国別城郭・陣屋・要害・台場事典』東京堂出版

恵曇の今昔を記録する会 2004『恵曇の今昔』恵曇公民館

永見高明 2006「大社湾周辺における台場」『大社の史話』大社史話会

中山英男「続松江藩時代－御船屋と御水主」2009年11月14日付 山陰中央新報